

OPINION

中部経済新聞

夏の終りまで、ロシアとウクライナとの戦争ばかりに目を奪われていたが、また驚くべき戦争が始まった。東ヨーロッパから中東という遠方でのこと、と他人事にするにはできず、東アジアに位置する日本のわれわれにも、燃料

「チビゲーター」

代や食料品の高騰という直接的な影響が出ている。戦争地域に近い世界の国々に住む「地球人」からの生の声で、本年を締めくくりたい。初めは、スイスから。

10月7日(土曜)に目覚めたとき、私は衝撃的なニュースに見舞われた。中東で新た

期待の日本へ
世界各地から

其 67

近隣諸国はどう考えているのか

な戦争が始まったばかりだった。ガザ地区を支配するパレスチナの過激派組織ハマスが、近隣のイスラエルの村や町を襲撃し、殺人と破壊をまき散らし、人質をガザ地区に連行していった。イスラエル側の反撃は目前に迫り、侵略への応酬とはいえず、少なくとも人的被害は明らかで、同じような破壊的なものになるだろうと想像できた。

中東の紛争 スイスからの見方(上)

なかつたので、すぐに通信社の各種報道に目を通し、紛争が地域内でどれくらいの速度で拡大しようのかをチェックした。南レバノンとヨルダン川西岸地域がその標的リストのトップになることはよく理解していたつもりだったが、メディアが示唆するよりもはるかに早いペースで、この脅威が現実化するとは思わなかつた。

同時に私の脳裏には、数十年前にわたるイスラエルとアラブの対立の構図が浮かんでい

た。特に、ほぼちようど50年前の1973年10月6日は、第4次アラブ・イスラエル戦争とも呼ばれるヨム・キプーイミニングで始まったのかは不明だ。戦争の再発を別にすると、2年半にわたるコロナ禍の影響とヨーロッパ大陸でまだ進行中のロシアとウクライナの戦争によって緊張が続いてきた。そのときは初め、正規軍どうしが本格的な軍事作戦に向かい合ったの

た。だが、今回の過激派民兵組織による民間人に対する今回の侵攻とは比較にならないといえる。永続的な成功の見込みがないのに、この戦争に込められる思いが、なぜとも思える。史が説明してくれている二つの結果、すなわちエネルギー危機とテロに關連した欧州内部における治安での危機に光を当てることが出来るかもしれない。この2側面から、簡単に検証してみたい。

まずエネルギー問題から。西ヨーロッパは、程度の差こそあれ、長期間、中東の石油に依存してきた。ヨム・キプーイ戦争の結果として始まった石油禁輸措置によって欧州経済は大きな打撃を受け、回復には長い時間がかかった。

【スイス ルジエロ・ウィズレル、リーム中産連】
(月曜日に掲載)